読んだ読んだ「盆土産」読み取りの足跡

一組　六場面

作者は、祖母が死んだ母親と祖父にえびフライのことについて説明をさせることによって、主人公に「えんびフライ」と聞こえさせ、主人公が今考えていることが分かるように設定した。

安井君

作者は、主人公に、祖父や母親たちに対して考えられる機会を作るために、祖母に「えんびフライ」と言わせた。えびフライがおいしいだけじゃなくて、この土産をきっかけに主人公はもう一度母親たちのことを見つめ直すことができたし、父親もまた、いろんなことを考えることができたと思う。だから、このように設定した。

近藤さん

作者は、家族そろって、祖父の母親の墓参りをしている場面で、祖母に「えんびフライ」とつぶやかせる設定にした。祖母にそうつぶやかせることで、主人公には、祖父や母親は生きているうちにこんなおいしいものは食べられなかったんじゃないかという思いが出てきた。そう思うと、主人公は、自分は二尾もおいしく食べられたけど、祖父や母親にも食べてもらいたかったとか、一緒に食べられれば、もっとおいしく食べられたかもしれないという気持ちになった。

白木さん

作者は、主人公が死んだ母親や祖父に申し訳ないと思っていることを伝えたかった。まず立派な墓を作ることができない申し訳なさ。そして、祖母に「えんびフライ」と言わせ、自分たちだけがいい思いをしたことに申し訳なさを感じさせるため、この場面を設定した。主人公は、母親にもえびフライのおいしさを伝えたかったと思う。

山本君

今まで主人公は、えびフライを食べておいしい!!とか、幸せな気持ちしか持っていなかったけど、作者は、祖母に墓の前で「えんびフライ」とつぶやかせることで、主人公に、生きているうちにえびフライを食べさせることができなかった祖父や母親への後ろめたさを感じさせるように設定した。

柴田さん

作者は、主人公の心を洗わすきっかけを作るために、祖母に念仏を唱えさせて、間に「えんびフライ」という言葉を入れるように設定したのだろう。主人公は、母親と祖父が食べてもいないえびフライという食べ物を自分は食べてしまったことをとても申し訳ないなと思っていたと思います。

牧野君

作者は、父親も含めた久しぶりの家族四人で墓参りに行き、その途中で祖母が念仏を唱えている間に「えんびフライ」という言葉を入れたのは、まず、主人公に昨夜食べたえびフライのことを思い出させ、母親に対する気持ちを描き、そこから父親の母親に対する「申し訳ない」などと言う思いを書き出すために、「えんびフライ」と祖母に言わせるように設定した。

古澤さん

作者は、父親が一日半しか休暇をもらえなかったのに主人公たちに会いに来ていて、さらにぎりぎりまで、すぐに帰らなければならないということを気を遣わせないために言わないという父親の家族への優しさをここでも描いている。また、作者は、主人公の中で、祖父と母親について思うところを描くために、祖母が「えんびフライ」という言葉を「なまん、だあうち」の中に混ぜるという設定にした。作者は母親の死に対して、苦労とか無念とかの、負の感情が強いことを表現するために、「早死に」という言葉を選んだ。

永田君